

【報告】

一橋大学附属図書館における肖像画コレクションのクリーニングについて

長名 大地

(学術情報課利用者サービス係)

一橋大学学術・図書部

1. はじめに

本稿は、2017年度にいただいた寄付金を元に、一橋大学附属図書館（以下、附属図書館）等が保管している肖像画コレクションを対象に実施したクリーニングに関する報告である。

附属図書館では2014年まで、大閲覧室をはじめとする館内各所に数多くの肖像画が展示されていた [図 1]。しかし現在、肖像画は一点も館内に展示されていない。それらは館内に設けた保管所等に保管されている。本稿は、その保管へと至った経緯から、今回のクリーニングの実施内容を紹介し、今後の肖像画コレクションの維持や活用についての展望を述べるものである。

2. 肖像画の保管

「2014年5月7日に1点の肖像画が突然壁から落下したため、利用者の安全と作品の保護を考慮し、すべてを倉庫に保管することになった」¹。このような物理的な要因によって館内から肖像画が姿を消した。その後まもなくして、時計台棟の改修工事（2014年8月から2015年3月）が行われた²。改修後の大閲覧室の壁は真っ白になり、照明もLEDに一新され、大扉の手前から利用者を見下ろすガーゴイルは脱皮した。しかし、生まれ変わった大閲覧室に肖像画が戻ることはなかった。かつてを知る利用者は何かが足りないという印象を抱いたことだろう。それはひとえに肖像画の落下という安全面への配慮と、作品保護の見地からなされた処置だったのである。

その後、取り外された肖像画はどうなったのか。肖像画全点は、絵画修復家・岡崎純生氏（岡崎絵画修復工房代表）による状態チェックを経て、図書館内に新たに設けられた肖像画

¹ 小泉順也. 一橋大学の肖像画：言語社会研究科教員の独白. HQ. 2016, vol. 52, p. 8.

² BELL. 一橋大学附属図書館. 2014, no. 112.

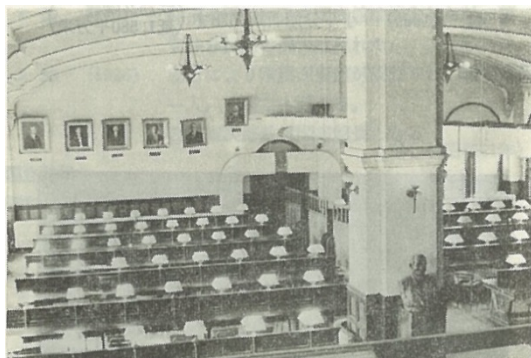


図1 以前の大閲覧室内の様子

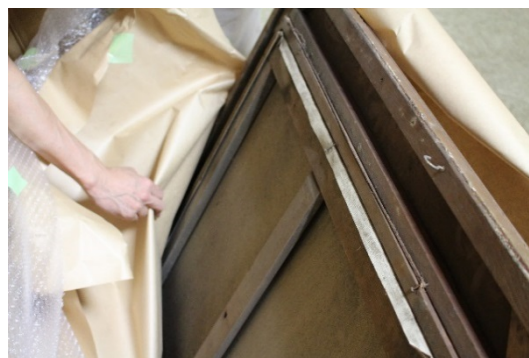


図2 クリーニング前の保管状態



図3 赤丸は付着した鳩の糞



図4 内倒し窓（赤丸が鳩の侵入経路）

専用の保管所等に収められることになった。ただし、状態チェックはしたものの、基本的に肖像画は取り外された状態のまま、紙に包まれ、挿し箱に入れ、保管されたのである。安全面への配慮から、まずは肖像画を取り外すことを最優先に奔走した図書館員の姿が目につく。実際、多数の肖像画が飾られていた大閲覧室は温湿度管理もままならず、理想的な環境とは言えない状況だった。多くの肖像画はチリや埃で汚れきっており [図2]、鳩の糞が付着したもの [図3] や、絵具が劣化しひび割れを起こして、今にも剥がれ落ちてしまいそうな作品もあった³。

³ 小泉順也. 文化資源としての一橋大学. HQ, 2016, vol. 52, p. 8-15.

なぜ室内で鳩の糞が付着するのか。今でこそ改善されたが、かつて大閲覧室には何度も鳩が侵入していた。それを追い払うことも、図書館員の重要な仕事の一つだったことは、あまり知られていないだろう。現在、正面玄関の大扉が閉ざされたままなのは、鳩の侵入を防ぐために学内決裁を取ってまでして講じた処置であり、鳩対策に手を焼いた過去の名残なのである。では、肝心の大閲覧室への鳩の侵入経路はどこだったのか。その答えはアーチ形の窓の上部に設けられた半円形の内倒し窓 [図4] にある。内倒し窓には、留め金がしてあるのだが、それが経年劣化によって、しばしば外れてしまったそうだ（現在は、はめ殺し窓となっている）。畢竟、窓は開いたままとなり、次々と鳩が大閲覧室に侵入していたのである。

「鳩との戦いに負け続けた」という、当時を知る図書館員によれば、「ここは鳩が住まう図書館だった」⁴ そうだ。つまり、それだけ劣悪な環境下に肖像画が晒されていたのである。

⁴ 鳩と図書館員の攻防は附属図書館の開館当初からの問題で長い歴史がある。その歴史を知る何人かの職員にインタビューを行った。なお2018年2月現在、館内に鳩が侵入することはなくなっている。ある職員は「旧建物は構造上、鳩や鳥といった野鳥が入り込む作りになっていた」という。大閲覧室内には複数のアーチ形をした窓があるが、その上部は内倒し型になっており、その留め金が経年劣化で緩くなったことから勝手に開いてしまおうになったという。それが鳩の侵入経路になった。大閲覧室の天井は非常に高いため、窓を閉めるのも一苦労だったが、いくら閉めても、すぐに外から鳩が突いて開けてしまったという。当時、朝の開館準備の一つとして、鳩がいないかどうか確認する作業もあったそうだ。大閲覧室に侵入した鳩は、壁面に飾られていた肖像画に止まっていることもあったという。また、肖像画は一度展示されてしまえば、取り外されることはなかったことから、当然、一度も清掃される機会がなかったそうだ（筆者によるO氏へのインタビュー、2018年2月21日、於学園史資料室）。1992年4月から1997年3月まで閲覧係（現・利用者サービス係）にいた職員によれば、当時大閲覧室の北側は接架（＝開架）エリアというブースで仕切られた空間だったという。そのブースの上部に、鳩が巣を作ってしまったことがあったという。当時、大閲覧室に網戸はなく、利用者が換気のために開けた窓からも、鳩やスズメバチが侵入したそうだ。鳩侵入の知らせを受けると、職員は鳩追いに駆り出されたという（筆者によるY氏へのインタビュー、2018年2月20日、於経済研究所）。以前、利用者サービス係長を務めていた職員によれば、ごく最近まで大閲覧室には鳩が頻繁に館内に侵入していたという。そのきっかけは、2009年の第二書庫の耐震改修工事（同年7月末耐震改修竣工）にあり、改修工事に伴い、第二書庫を住まいとしていた鳩が移住を余儀なくされ、時計台棟に移動してきたそうだ。そのため、時計台棟の壁面上部（LANケーブルを這わすための受け皿が壁に付けられていた）に鳩が巣くうようになり、その鳩が増えたことで大閲覧室にも侵入していたという。しかし、鳥獣保護法により鳩を無許可で駆除することはできないため、図書館員は侵入したらその都度、棒やピンポン玉で鳩を追い出すしかなかったという。しかし、帰巣本能の強い鳩は、追い出しても、追い出しても、侵入を繰り返したという。そうした状況が改善されたのは、2014年の附属図書館時計台棟改修以降である。そ

館内から姿を消した肖像画は、一橋OBからの寄付金等により、これまで4点(2018年2月現在)の修復が実施されてきた。特に、福田徳三と中山伊知郎の肖像画を修復した際は、修復記念として「学者の肖像 学者の風景：福田徳三・中山伊知郎展」(2016年5月12日～18日)を図書館展示室で開催した。それに併せて、小泉准教授が『HQ』誌に「一橋大学の肖像画：言語社会研究科教員の独白」⁵を寄稿し、2点の肖像画修復に関する詳細を報告している。こうした背景から、肖像画には修復が必要という認識が徐々に広まっていったように思う。

肖像画の修復には、1点あたり数十万円から数百万円という高額な費用と時間がかかる。そのため、すべての肖像画を修復にかけようとする、莫大な資金と時間を要することになる。予算削減の状況下、そうした費用を図書館の運営費で賄うことは困難である。そのため寄付金をいただいたごとに修復にかけていくという場当たりの状況が続いてきた。年に1、2点ずつ修復にかけられるような長期計画が立てられれば理想的だが、寄付等で費用が捻出できなければ着手できなかったのである。

しかし、筆者が最も問題視したのは、保管されている肖像画の状態である。たとえ修復費が付かず、手が付けられない状況だったとしても、到底看過できない状態で保管されていたのである。「利用者の安全と作品の保護を」優先したための応急処置だとしても、すでに2年近く経過しているが、その間、鳩の侵入による汚損や、積もりに積もった埃もそのままだったのである。いつ修復されるかわからない状況下、このまま保管し続ければ、カビの発生や虫損など、二次被害が発生する可能性が極めて高い状況であることは明らかだった。また、多くの肖像画は、必ずしも本格的な修復を必要とする状態ではなかった。こうした状況から、修復までの応急処置として、せめてクリーニングだけでも実施できないかと考えていた。そんな中、小泉明元学長⁶のご息女である清水京子様より、小泉明元学長の肖像画の寄贈申し出を受けた。その際、肖像画の寄贈とは別に、小泉元学長にゆかりの深い「バート・フラン

の時期には正面玄関の大扉も常時閉鎖されるようになった。これらの対策によってようやく鳩を締め出すことに成功したのである(筆者によるH氏へのインタビュー、2018年2月7日、於附属図書館)。

⁵ 小泉順也。一橋大学の肖像画：言語社会研究科教員の独白。HQ. 2016, vol. 52, p. 8-11.、小泉順也。初代校長の肖像画を巡る謎～黒田清輝と一橋大学～。如水会会報. 2018, no. 1042, p. 26-29.

⁶ 小泉明元学長に関しては以下を参照。長澤惟恭。小泉教授を偲ぶ。一橋論叢. 1978, vol. 79, no.5, p. 499-503.

クリン文庫」⁷の整理や広報と、肖像画の修復費という用途で寄付をいただけることになった。そこで、肖像画の修復費の一部をクリーニングに充てることになったのである。

3. クリーニングの実施

肖像画のクリーニングを実施する際、一番の目的は、「資料劣化の進行の促進要因を軽減」とした。また、実際に作業を実施するかどうかは絵画の状態によって、クリーニングに耐えられる作品のみを対象とした。そこで(1)修復済み、(2)比較的状态が良好な作品、(3)状態が悪く、クリーニングによって劣化する危険のある作品という3つに大別した。(3)はクリーニングでは対応しきれないため、今回は(2)に該当する作品30点[表1]を、クリーニングの対象とした。

実際の作業に関しては、これまで様々な美術館で絵画作品の額装やクリーニングに携わった実績のある額装家・高野淳一氏⁸に依頼した。絵画それ自体のクリーニングは最小限にとどめ、長期保存の観点からリスクとなるカンヴァスの裏側や、額縁に積もった埃の除去と、鉄さびを起こしている金具類の交換を依頼した。もちろん、クリーニングの対象作品であっても、作業中に想定よりも状態が悪く、作業に耐えられないと判断した場合は、すぐさま中断するという取り決めを交わして実施した。

図書館内にクリーニングのスペースを設けることは不可能であることから、対象の肖像画全点はすべて高野氏の作業場に運搬したうえで、クリーニングを実施することになった。平成29(2017)年7月31日に附属図書館からクリーニング対象の肖像画全点を運搬し、3か月かけて、クリーニング作業に取り掛かっていただいた。基本工程は、(1)状態チェック、(2)額はずし、(3)カンヴァスのクリーニング、(4)額縁のクリーニング、(5)釘、フック等の金具交換、(6)挿し箱、及び、黄袋作成とした(詳細は以下の写真を参照)。

以上の工程により、肖像画のクリーニングは完了した。肖像画全点は2017年10月30日

⁷ バート・フランクリン文庫は、一橋大学社会科学古典資料センターに所蔵されている貴重書コレクションの1つ。コレクション入手の経緯は以下を参照。都留重人。“Burt Franklin Collection - donated by Mitsui Group Companies”入手の経緯。一橋大学附属図書館史。一橋大学, 1975, p. 239-246. 細谷新治。「バート・フランクリン文庫」の調査の思い出。一橋大学社会科学古典資料センター年報. 1981, vol. 1, p. 2-6. 津田内匠。『気球航空会社の設立』(1790年)ーフランクリン文庫の一冊一。一橋大学社会科学古典資料センター年報. 1984, vol. 4, p. 5-8.

⁸ 現在、練馬区立美術館で学芸員を務める小野寛子氏から紹介を受けた。高野氏は練馬区立美術館をはじめ、国立西洋美術館や東京都美術館、埼玉県立美術館等での作業実績がある。

に附属図書館に戻り、保管庫等で保存されている。

(表1) クリーニング実施一覧

| 肖像画 | 作家名 | 肖像画 | 作家名 |
|---------------|-------------------|----------|--------------------|
| 1 W.C.Whitney | 中山正実(1898-1979) | 16 上田辰之助 | 和田三造(1883-1967) |
| 2 村松恒一郎 | 森芳雄(1908-1997) | 17 鹿野清次郎 | 中沢弘光(1874-1964) |
| 3 A.J.Hare | 石河光哉(1894-1979) | 18 成瀬隆蔵 | 田辺至(1886-1968) |
| 4 下野直太郎 | 和田英作(1874-1959) | 19 新緑の夕 | 高木背水(1877-1943) |
| 5 奈佐忠行 | 和田英作(1874-1959) | 20 山口弘一 | 石河光哉(1894-1979) |
| 6 高垣寅次郎 | 伊原宇三郎(1894-1976) | 21 井浦仙太郎 | 刑部人(1906-1978) |
| 7 井藤半弥 | 木下孝則(1894-1973) | 22 内池廉吉 | 石河光哉(1894-1979) |
| 8 高瀬荘太郎 | 和田英作(1874-1959) | 23 木村恵吉郎 | 児島喜久雄(1887-1950) |
| 9 堀光亀 | 石河光哉(1894-1979) | 24 太田哲三 | 高島達四郎(1895-1976) |
| 10 内藤章 | 田辺至(1886-1968) | 25 星野太郎 | 水船(船)三洋(1903-1945) |
| 11 山内正瞭 | 森田元子(1903 - 1969) | 26 佐野善作 | 田辺至(1886-1968) |
| 12 石川文吾 | 和田英作(1874-1959) | 27 三浦新七 | 宮本三郎(1905-1974) |
| 13 関一 | 石河光哉(1894-1979) | 28 上田貞次郎 | 宮本三郎(1905-1974) |
| 14 青山衆司 | 清水登之(1887-1945) | 29 藤村義苗 | 有島生馬(1882-1974) |
| 15 藤本幸太郎 | 木下孝則(1894-1973) | 30 小泉明 | 調査中 |

※20-29番は学園史資料室で保管

(1) 状態チェック



・受け入れ時の状態確認、撮影、採寸

(2) 額はずし①



・釘、フック、掛け紐の除去

(2) 額はずし②



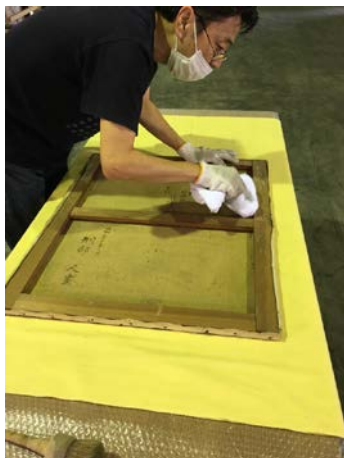
・額はずし

(3) カンヴァスのクリーニング①



・裏面のエアークリーニングによる埃除去

(3) カンヴァスのクリーニング②



・カンヴァス裏面の布による埃除去

(3) カンヴァスのクリーニング③



・カンヴァス表面の精製水による埃除去

(4) 額縁のクリーニング①



・額縁のエア吹き、布による埃除去

(4) 額縁のクリーニング②



・額縁の精製水による汚れ落とし

(4) 額縁のクリーニング③



・鉄さびを起こしている釘の交換

(5) 釘、フック等の金具交換①



・裏面のフック等の交換作業

(5) 釘、フック等の金具交換②



・額はめ

(6) 挿し箱、黄袋作成



・肖像画の寸法に合わせ黄袋・挿し箱を作成

4. おわりに

これまで附属図書館が抱える肖像画コレクションが館内から取り外された経緯と、クリーニングの実施内容について述べてきた。附属図書館、および、学園史資料室が保管している41点の肖像画コレクションのうち、4分の3にあたる30点のクリーニングを実施することができた。クリーニング後の肖像画は作業前に比べ、絵画本来の色合いを取り戻し、額縁のつやも復活した。これで修復が済んでいる、または修復予定の肖像画は5点〔表2〕で、未着手のものが6点〔表3〕となった。ただし、クリーニングが済んでいる肖像画は、一目見ただけではわかりづらいが、ひび割れを起こしているものもあり、展示するためには修復が必要である。しかし、今回は長期保存という観点から肖像画の状態を引き上げることが目的だったため、それはおおむね達成できたように思う。

(表2) 修復済み、または修復予定の肖像画

| 肖像画 | 作家名 | 修復年 |
|-------|-------------------|---------|
| 福田徳三 | 荒井陸男(1885-1972) | 2014年 |
| 中山伊知郎 | 宮本三郎(1905-1974) | 2014年 |
| 山中篤太郎 | 宮本三郎(1905-1974) | 2017年 |
| 矢野二郎 | 伝・黒田清輝(1866-1924) | 2018年 |
| 山口茂 | 野田好子(1925-) | 2018年予定 |

(表3) 未クリーニング、未修復の肖像画

| 肖像画 | 作家名 |
|---------|------------------|
| 根岸佶 | 石河光哉(1894-1979) |
| 中村進午 | 津田耕造(1892-1971) |
| 増地庸治郎 | 安井曾太郎(1888-1955) |
| 山口鑑太 | 石河光哉(1894-1979) |
| 吉田良三 | 石河光哉(1894-1979) |
| 緑蔭[風景画] | 高木背水(1877-1943) |

課題としては、修復もされず、今回のクリーニングにも耐えられないと判断された6点の作品が、取り外された時のままで保管されているということである。今後、これらの作品を優先して修復するための方策を練る必要があるだろう。

さらなる展望としては、肖像画コレクションをいかに活用していくかである。歴代の学長の肖像画で、これほどの数を抱える大学は少なく、学園史の観点からしても非常に重要な文化財⁹である。今回の取り組みにより、肖像画コレクションの多くの作品の状態が改善された。今後は、継続事業として修復等を実施していくのと同時進行で、これらの重要なコレクションを展示するための温湿度管理の整った施設ができることを強く望む。

⁹ 小泉順也. 銅像、肖像画、建築など. 言語社会. 2016, vol.10, p.17-21.

謝辞

最後になりましたが、肖像画クリーニングのために寄付をくださった清水京子様、クリーニングの作業を一手に引き受けてくださり、素晴らしい仕事をしてくださった高野淳一様、インタビューにご協力くださった図書館職員の皆様にお礼申し上げます。

[Report]

Cleaning of Portrait Collection in Hitotsubashi University Library

Osana, Taichi.

Circulation Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,
Hitotsubashi University